

Geomythology(地球神話)をジオパーク活動にもっと活かそう

Let's make more use of Geomythology in Geopark activities!

野村律夫

Ritsuo NOMURA

島根半島・宍道湖中海（国引き）ジオパーク推進協議会

Shimane Peninsula and Shinjiko Nakaumi Estuary Geopark Promotion Council

e-mail: nomura@edu.shimane-u.ac.jp

1. はじめに

地質学・地形学は人々の生活の中で芽生えてきた学問で、その原点は神話(myth)や伝説(legend)で語られる自然とも共通している。現在の神話学(mythology)では、神話・伝説は、人の生き方や自然などの古代からの人々のものの見方や考え方が、現在に引き継がれてきたもの(大林, 1966)と理解されており、地域の神話・伝説の中に地球科学的な意義を読み取ることによって、私たちの自然観を時間や分野をこえて多彩なものにすることができよう。しかし、神話と科学は別々のもので、神話は非論理的・非科学的なものとする人も多いし、過去の歴史から神話を科学と結びつけることに忌避感を持つ人も多いのも事実である。

このような国内の神話・伝説に対する認識に対して、欧米では1960年代から神話や伝説で語られている地質・地形・自然災害を科学的に解釈する学術が活発化した。旧約聖書にあるような神話伝説を地質学な検証で説明しようとする分野としてVitaliano(1973)がGeomythologyを提唱し、第一線の地質研究者による洪水神話の解釈(Ryan and Pitman, 1998)やイギリスの地質学会が発行したMyth and Geology(Piccardi and Masse, eds., 2004)には日本を除く国々の神話を地質学で語っている(図1)。

昨年、島根半島・宍道湖中海ジオパークで開催されたジオパーク全国大会では、全国の各ジオパークで語られている神話・伝説を持ち寄り、国内に地質学的変動帯にふさわしい多様な地質現象と関連した神話伝説が多くあることを確認した。本シンポジウムは、先の企画に続いて、神話伝説の地質地形学的な理解をさらに深めてみたい。

2. 神話伝説の形式と地質学的視点

(1) 神話伝説は、民族や文化によって違いがある

が、基本的にエウヘメリズム(歴史上の人物、英雄によってその事象を語る)と寓意性(allegory, 比喩的にある事例に託して語る)で構成されている。風土記には巨人伝説が多い。

(2) 地球神話には自然形成の原因説明や説明をする神話(etiological または explanatory myth)と災害を伝える伝説(火山・地震・津波・地殻変動・洪水・環境変化など)がある。

(3) 地球神話は地質学、歴史学、考古学、民俗学などの分野を融合しており最も広域で学際的。

(4) 神話と伝説を明確に区別することはできない。そのため、その起源にかかわらず、ここで扱う神話伝説は地質学的に科学が認められる民間伝承(folklore)である。

(5) 類似の神話・伝説は、異なる場所で独立して語られた多元発生説と、1つの地域での語り(単元発生説)と伝播・混交(syncretism)がある。地球神話は多元発生であることが多い(参考: 大林太良(1966)は神話を単元発生で拡散・混交が主要と考える)。

(6) 伝承の信頼性については、フィクションや口述の変容もあり注意を要す。e.g., ベリンガー事件(化石のねつ造; ~ 1726年)やピルトダウン人事件(化石人骨ねつ造; ~ 1910-1949年)。

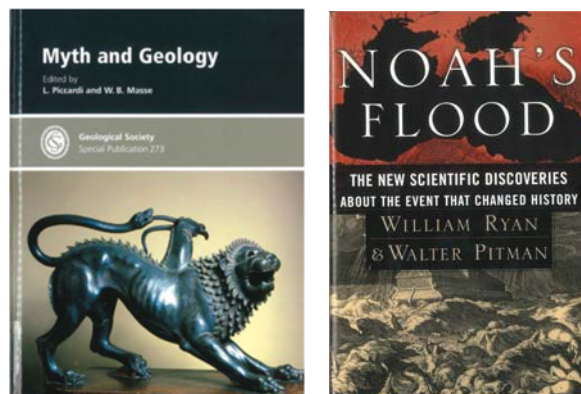


図1. 地質学研究者による geomythology (引用文

献参照)

3. 伝説の「赤い石の海岸」にみる学術

島根県出雲市坂浦町にある赤浦は、古くから赤い石の海岸として知られ、1717年に編さんされた出雲の歴史書「雲陽誌」に記述されている。一畑薬師寺の創建にかかわって古くからあるこの海岸の赤い礫を Geomythology の視点でふれてみたい。



図2. 赤い石からなる赤浦の礫浜海岸

赤浦海岸の背後の海食崖は、灰緑色の流紋岩火山礫凝灰岩よりなっているため、赤色系の流紋岩は分布していない。海岸の東端部の地蔵鼻には、赤色化した流紋岩の溶岩・火砕岩が顕著に発達しており、その上位と下位には安山岩が分布する。地蔵鼻から赤浦海岸にかけて点在する島は、これらの岩体の走向方向に合致しており、陸に近い島は安山岩の火山角礫岩、または火山砕屑性の凝灰質礫岩よりなる。また、水深5mまで安山岩の岩礁が点在しており、これらの安山岩体が赤浦海岸と地蔵鼻を分断する構造になっている(図3)。

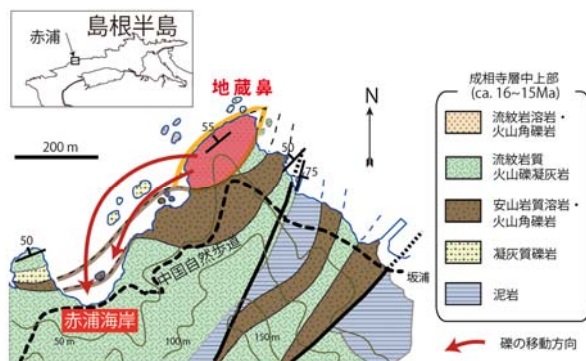


図3. 赤浦海岸付近の地質図(野村原図)

「赤い石」は灰白色、淡黄褐色、黄褐色、茶褐色、赤褐色など多様な色合い有している。赤色の強い礫には赤鉄鉱が確認され、赤色～黄褐色の多様な色調は、赤鉄鉱やゲータイトやレピドクロサイトのようなオキシ水酸化鉄の含有量の違いによって変化する。赤い海岸の理由は、単位面積当たりの赤

色系礫の占める割合が汀線域で高いため、海水によって赤色系が特に目立つことによる。しかし、礫長1cm程度の礫の割合は極めて低く、平均1.5%しかない。そのため、赤浦海岸の赤色系礫は異地性であると判断でき、供給先として地蔵鼻の流紋岩が考えられる。

図3に示す矢印が供給ルートを考えたが、地蔵鼻と赤浦の間には安山岩体があるため、赤色流紋岩の移動に伴って、黒色安山岩も移動しているはずである。実際、多くの黒色安山岩礫が暗礁地帯には多く分布する。しかし、赤浦海岸における黒色安山岩の割合は極めて少ない。移動過程については不明確さが残っている。

「この浜の石は赤い」と、その不思議さを語った人々が、このような背景をもった石であることに気づいていたかどうかは分からない。しかし、礫の移動という現代科学にも通じる視点を私たちに投げかけている。

4. 民間伝承を利用する意義と効果

神話伝説、いわゆる地域の伝承は、人々が経験した災害の伝承や土地の成り立ちを説明するものが多く、学部学生の地質学への導入や人々の地質学的自然への関心を高める素材として利用しやすい。また、地学を学んだことのない人たちにとっても地域の歴史や文化の形成が地質地形に深く関連していることを知ることにもなるであろう。地域の自然をアピールしているジオパーク活動にとっては、地域住民が学術を身近に感じ、自然・文化遺産の理解と保全、防災教育、地域への誇りを醸成する役割を果たしてくれるにちがいない。

5. 引用文献

- 大林太良 (1966): 神話学入門. 中央新書.
- Piccardi, L. and Messe, W. B., eds. (2007): Myth and Geology. Geological Society Special Publication, no. 273. The Geological Society of London.
- Ryan, W. and Pitman, W. (1998): Noah's Flood. The new scientific discoveries about the event that changed history. Simon & Schuster, New York.
- Vitaliano, D. B. (1973): Legends of the Earth: Their Geological Origins. Indiana University Press, Bloomington.

アイヌ民族の伝承とジオパーク

Ainu folklores and Geoparks

大野徹人

OONO Tetuhito

アポイ岳ジオパーク推進協議会

Mt. Apoi Geopark Promotion Council

e-mail: apoinupuri@bear.odn.ne.jp

1. はじめに

北海道南部の日高地方の様似町に位置するアポイ岳ジオパークは、地質的に価値の高いかんらん岩と、高山植物を特質として持つことで知られる。また、アポイ岳以外に、沿岸地域に、親子岩やソビラ岩、冬島の穴岩など、数々の奇岩があることでも知られている。

アポイ岳ジオパークに含まれるさまざまなジオサイトの中には、アイヌ民族の伝承に関わるものが数多く含まれる。

本発表では、様似町のアポイ岳ジオパークにおけるアイヌ民族の伝承の関連について報告し、地質学と、民間の伝承がどのような関わりを持っているのか、論じたい。

2. アイヌ民族の概要

アイヌ民族は、北海道・樺太・千島列島を中心に代々生活を営んできた先住民族である。古くは本州北部にも住んでいたことが分かっている。

北海道の道都、サッポロはじめトマコマイ、クシロ、フラノ、ノボリベツなど、北海道各地にはアイヌ語の地名が多数残されており、それらはアイヌ民族が北海道に古代より代々暮らす中でつけられたもので、その中には、「大きな川」や「崩れた崖」など、その場所の地形的な特徴などに基づいてつけられた名前もあれば、「ギョウジャニンニクをとる場所」「ウバユリを掘る場所」など、アイヌの利用する山菜・野草のとれる場所や、「魚の集まる場所」「ウサギのいる沢」などのように、魚や獣、鳥の生息地など、日常的な生活に関わる場所も多数ある。

また、アイヌ民族の伝統的な信仰や伝承と密接な関わりがある場所も各地にあり、アイヌの信仰する神々のいる場所や、かつて自分たちの先祖たちが体験した何らかの事件があった場所など、子孫に代々伝えてべき重要な情報が地名の形で残されている。

3. アイヌ民族の伝承文学

アイヌ民族の伝承文学にはさまざまなものがあり、これまでさまざまな形で記録が行われている。かつては口承により代々伝えられてきた物語である。

その中には知里幸恵の『アイヌ神謡集』に代表されるような、神を主人公とする物語（カムイユカラ）や、萱野茂の『アイヌの昔話』のように、人間を主人公とする昔話（ウエペケレ）などがあるほか、先祖の体験した出来事や場所の起源や歴史に関する物語もあり、これらは日本語で言うところの「伝説」ということになり、アイヌ語ではウチャシクマなどと呼ばれるものである。

4. 様似におけるアイヌ民族の伝説

アポイ岳ジオパークにおける中心的な存在であるアポイ岳は、アイヌ語のアペ・オ・イ（火・ある・ところ）を語源にしており、かつては、山頂で鹿がとれることを願って儀式を行ったことから、この名前がついたといわれている。

アポイ岳は、マッネシリ（女山）とも呼ばれており、その北側に位置するピンネシリ（男山）と対になっており、夫婦の山とされているが、山そのものもアイヌ民族にとっては神であり、信仰の対象とされていた。

また、ジオサイトの一つである親子岩という、親子のように並ぶ3つの岩は、その風光明媚な景色もあり、様似のシンボルとされているが、それについても、かつて戦に敗れて様似まで逃げてきたおさが、海に入り岩になったものの、それに敵の矢が当たり3つに割れたものであるという伝説がアイヌ民族において伝わっている。

5. ジオパークにおける伝承の意味

ジオパークは、地質だけではなく、その自然環境の中で育まれてきた人間のあゆみ、歴史も一体のものとして考えられており、その構成要素として重要であるとされている。その場所を、太古よりそこに暮らしてきた人たちがどのように解釈し、理解

してきたかは、その場所に関する情報として重要なものである。

実際には人間が岩になることは、科学的にはありえないことであるが、実際、こういった岩の由来についてこの話が古くより伝わってきており、かつての人たちはそれを本当にあったこととして信じ、語り伝えていた。

また、アポイ岳だけでなく、北海道内の存在する、各ジオパークにも先住民族アイヌと関連する要素が数多く含まれている。

そして、アイヌ民族に限らず、本州・四国・九州の各ジオパークと民間伝承の関連についても研究の余地がある。たとえば、花部英雄編『ジオパークと伝説』は、日本国内における近年の研究成果として意義があるものである。

6. 過去と現在

今現在の我々は科学的知識を持っているので、新型コロナウイルスの存在を知っており、感染症はウイルスが引き起こすものであることを理解している。しかし、かつての日本人たちは、病気は魔によって引き起こされるものであると考え、祈祷や儀式によって病魔を追い払ったり、治療しようとしたりもした。また、地蔵は単なる石ではなく、魂を持った存在として尊んできた。これらを単に「迷信」と片付けていいのだろうか。

そして現在も、その文化の片鱗は生きていることはまぎれもない事実である。たとえば、単なる木製品であるはずの仏像や位牌、仏壇を大事にする精神文化は今も生きているし、実際に科学的効果があるかどうかと関係なく、無病息災を祈って神社や寺院に詣でる文化は日本において今も根強く実践されている。

過去の人たちは、現在の我々と断絶しているわけではなく、過去の延長線上に私たちは存在している。ジオパークにおいて伝承がどのようにあるのかを学ぶことは、現在のわれわれのあり方を考えるヒントにもなるはずである。

7. 引用文献

萱野 茂 (1993) : アイヌの昔話. 平凡社ライブラリー.

花部英雄 (編) (2018) : ジオパークと伝説. 三弥井書店.

知里幸恵 (1978) : アイヌ神謡集. 岩波文庫.

磐梯山に伝わる伝説・昔話

Traditional and old tales around Mt. Bandai

竹谷陽二郎

Yojiro TAKETANI

磐梯山ジオパーク協議会

Bandaisan Geopark Council

e-mail: yojirotak.11-22@sa2.so-net.ne.jp

磐梯山およびその周辺にはたくさんの伝説や昔話が残っている。その中で、特に地形・地質にまつわるものについて紹介し、それらを自然科学的見地から読み解いてみたい。

1. 代表的な伝説・昔話

(1) 恵日寺縁起

会津藩による領内の地誌で、1803 年から 1809 年にかけて編纂された「新編会津風土記」の巻之五十三には、恵日寺縁起（恵日寺誕生の由来を書き記したもの）として、「磐梯山はもとは病悩山といい、魔物が住み常にたたりをなして農作業に害を与えていた。それだけではなく、山麓に民が多く生活していたのに、大同元年暴れて一大湖を成した。この災異が朝廷に知られたことにより、大同 2 年空海が勅命を受けてこの地に来た。河沼郡にて 10 日ほど秘法を修めたところ、魔物は別の峰の烏帽子岳まで去った。空海は山の名を磐梯と改め、長く災異を鎮めるために当寺を開くことをはかり・・・（現代語訳）」とある（阿部（編），2001a）。
＜科学的説明＞

大同元年(806)近辺に磐梯山が噴火したことを示す地質学的な証拠はない。恵日寺は空海ではなく徳一が開いた寺である。東北地方には大同 2 年に空海が開いたという縁起をもつ神社仏閣が多々あり、大同という年代にも疑問がある。一大湖を猪苗代湖とする説もあるが、猪苗代湖が誕生したのは約 5 万年前であることが地質学的な研究で判っている。山元(2018)が指摘しているように、古代に噴火に関連した山崩れなどにより川がせき止められ、小規模な湖が誕生した可能性はある。

(2) 猫石 雄猫と雌猫

磐梯山の東側を流れる長瀬川の東岸、伯父ヶ倉集落の北西のところに猫石と呼ばれる巨大な岩がある。長瀬川を挟んで西側にもう一つの巨岩がある。これら二つの岩には次のような伝説がある。

昔、磐梯山が噴火した時、夫婦の猫が難を逃れて山を下り、長瀬川にさしかかり、雄猫は強いので川を渡って逃げ延びたが、雌猫は遂に川を越せなかった。それで雌猫は渋谷で猫石と化し、雄猫は白木城に生きながらえて、妻の猫石の参拝を欠かさなかった。（猪苗代町史編纂委員会（編），1979）。この猫石には、養蚕の大敵である鼠を退治する霊力が備わっていると考えられ、近隣の人たちから慕われていたという。

＜科学的説明＞

二つの猫石は、約 2500 年前の磐梯山噴火に伴い発生した琵琶沢岩なだれにより運ばれたと考えられる巨岩である。両岩は安山岩質の溶岩および火山角礫岩からなり、アグルチネートと推定される。琵琶沢岩なだれが運んだ岩塊のうち、長瀬川を越えたものと越えなかったものが雄猫と雌猫に対応しているのがおもしろい。

(3) 弁慶の硯石

磐梯山南麓に、近世の会津と中通りを結んだ交通路である旧二本松街道沿いに一つの巨岩がある。源義経一行が京都から平泉に逃れるためにこの地を通った際、武蔵坊弁慶が山水の美を記すためにこの巨岩で墨を擦ったと伝えられている（猪苗代町史編纂委員会（編），1979）。一説には、弁慶が小豆を借りた証文を書いた時に、この巨岩を硯石代わりに使ったという伝説もある。確かに巨岩は上面が平たく少し窪んだ形を有しており、雨水がこの窪みによく溜まる。

＜科学的説明＞

この巨岩は、約 5 万年前の磐梯山噴火で山体が崩壊した際、発生した岩なだれ（翁島岩なだれ）により運ばれた安山岩の岩塊と推定される。この地域には翁島岩なだれにより形成された流れ山地形が発達しており、その中に古期の磐梯火山を構成していた安山岩の岩塊が多数含まれる。

(4) 源翁石

「弁慶の硯石」の近くにある巨岩。南北朝時代の曹洞宗の僧である源翁が那須の殺生石を諫めた際、一喝で石の大半は砕け飛び散ったが、かけらの一つがこの地に飛んできた。後難がないようにと、源翁がさらに石を割ったと伝えられている。

<科学的説明>

この巨岩は、弁慶の硯石と同様、約5万年前に発生した翁島岩なだれにより運ばれた岩塊と推定される。岩の表面に見られる割れ目は、岩なだれ岩塊に特有のジグソークラックである。

(5) 翁島

磐梯山の南側にある猪苗代湖唯一の島である翁島誕生について一つの伝説がある。その昔、磐梯山南麓に「おきな」という名の機織り娘が住んでいた。ある日、通りがかりのみすぼらしい僧侶が、村人に水を飲ませて欲しいと求めた。多くの村人が迷惑そうにこれを断る中、心優しいおきなだけが僧侶に水を与えた。その僧侶は「あなたには必ず良いことがあります」と言い残して村を去った。磐梯山が噴火したのはその3日後である。にわかには溢れてきた水で、村は猪苗代湖の底に沈んでしまったが、村はずれのおきなの家のまわりだけは水の上に残り島となった。それからは、その島を誰となくおきな島(翁島)と呼ぶようになった(前田ほか, 2022)。

<科学的説明>

約5万年前に生じた磐梯山噴火による翁島岩なだれによって、会津盆地に流れていた河川が堰き止められ猪苗代湖が誕生した。岩なだれは山麓に流れ山とよばれる丘陵をたくさん形成した。翁島はこの時の流れ山の一つである。

(6) 材木岩

新編会津風土記巻之二十七に、材木岩について次の記述がある。「篠山村(現会津若松市赤井字笹山)の北方の猪苗代湖に面した岩の上にある。また中田村の東方にもある。両岩ともに、むかし磐梯明神が作ったものという。磐梯明神が一夜の内に猪苗代湖に石橋を架けようとしたが、途中で夜が明けてしまったのでそのまま棄て置いたと言われている。(現代語訳)」(阿部(編), 2001b)。

<科学的説明>

新第三紀中新世の500万～1000万年前に噴出したデイサイト溶岩が固結する際、規模の大きな柱状節理をなしたものである。江戸時代には、猪苗

代湖から流出する日橋川に架かる十六橋を建設する際の石材として使われたという歴史がある。

2. 伝説・昔話の意味するもの

伝説・昔話を読んでまず感ずるのは、昔の人の想像力と創造力の豊かさである。普段見慣れない奇異な形態を持つ自然物に対して、想像力を働かせ興味をひく物語を造っている。

もう一つは、火山は崇拜する対象であったが、住民にとっては災いをもたらす恐ろしい存在でもあったということである。火山信仰は、火山が災いをもたらさないように祈るという意味もあったのであろう。これは当時の人々の自然観や宗教観を表している。

磐梯山周辺には、魔物に対して弘法大師が登場し成敗するという話がたくさんあるが、これは当時の仏教の布教と関係していると思われる。

3. ジオパークでの活用

現代に生きる我々は、伝説や昔話を科学的な根拠をもとに否定しがちである。しかし、ジオパークにおいて重要なのは、単に科学的な知識を習得し伝えるだけではなく、目の前の地形や地質の成り立ちについて想像力を働かせ共に考えることであろう。伝説や昔話に見られるスケールの大きい物語は、ジオツアーに参加した訪問客に興味を持たせ、想像力を働かせるきっかけとなりうる。

伝説や昔話からは、長年に渡り火山と共存してきた人々の自然観を知ることができる。それらは地域で育まれてきた大切な文化遺産である。ジオパークがその遺産を保全し発信することにより、火山と人間との関係を再認識し、地域のアイデンティティを高めることに貢献できると考える。

4. 引用文献

- 阿部隆一(編)(2001a):新編会津風土記第三巻, 40-41. 歴史春秋出版.
- 阿部隆一(編)(2001b):新編会津風土記第二巻, 39. 歴史春秋出版.
- 猪苗代町史編纂委員会(編)(1979):猪苗代町史民俗編. 919p.
- 前田智子・菊地悦子・鶴賀イチ(2022):会津のむかしばなし 1 耶麻地方. 126p. 歴史春秋出版.
- 山元孝広(2018):磐梯火山, 最新期の火山活動. 火山, 63, 37-48.

大国主命(出雲)と奴奈川姫(古志)の伝説からたどる糸魚川ジオパークの景観

Landscape of Itoigawa UNESCO Global Geopark traced by traditional folklore of the god
Okuninushi-no-mikoto and Princess Nunakawa

竹之内 耕

Ko TAKENOUCHI

フォッサマグナミュージアム

Fossa Magna Museum

e-mail: ko.takenouchi@city.itoigawa.lg.jp

1. 出雲と古志, 諏訪の関係

糸魚川ジオパーク(以下, 糸魚川)には, ヒスイの玉の生産を支配したとされる奴奈川姫(図1)の伝説がいくつか残り, 姫を祭った神社が多い。古事記には, 出雲の大国主命が古志の奴奈川姫へ求婚する物語があり, その子, 御穂須々美命は美保神社(島根県松江市)の祭神になったとされる一方, 先代旧事本紀には, その子, 建御名方命は諏訪大社(長野県諏訪市, 茅野市, 下諏訪町)の祭神になったとされる(岡本, 2022)。出雲大社近くの遺跡からヒスイ製勾玉が出土していることから, 出雲と古志には何らかの関係があったのではないかと考えられている。

また, 糸魚川には, 大国主命と地元の神が奴奈川姫をめぐる争い, ことごとく地元の神が負けたという伝説が残る(土田, 1990; 中村, 1986, 2000)。出雲からの人や文化・信仰の移動は, 東方の古志(福井県・石川県・富山県・新潟県)へ広がり, さらに信濃や関東へと広がったとされることを考えると(岡本, 2022), 神同士の争いの顛末は, 出雲と糸魚川の関係の成立過程を暗示しているのかもしれない。

このように大国主命や奴奈川姫の伝説が糸魚川の各地に残り, いずれも山, 岩, 海, 崖, 洞窟など特徴的な地形や地質がある場所が舞台となっている。

2. 伝説の舞台と景観

(1) 奴奈川姫の生まれた場所

奴奈川姫の産所とされる岩井口(能生川支流島道川左岸)の近くには, 神々が通ったという伝承にちなむ神道山がある(能生町史編さん委員会, 1986)。糸魚川―静岡構造線(以下, 糸静線)の東側にあたるこの周辺は, フォッサマグナの海底に堆積した地層が隆起して山々を形成している。産



図1 奴奈川姫と建御名方命(糸魚川市海望公園)

所は, 安山岩質凝灰角礫岩(下部更新統)であり, 南方には急峻な権現岳(標高1104m, ヒン岩の貫入岩体, 下部更新統)が聳える(長森ほか, 2018)。奴奈川姫の住处とされ, 中腹に胎内という岩屋がある。後述する黒姫山と並んで海上からよく識別できる独立峰である。

権現岳のすそ野は砂岩泥岩(中新統)からなり, 地すべりによる緩傾斜地が広がる。1947年5月19日に柵口地すべりが発生した。破壊された集落や農地の移転が検討されたが, 地すべりが起こった後は, 米の収量が上がることを見込み, 結局移転は行われなかった。地すべりは, 山間地に緩傾斜地をつくり, 水持ちがよい棚田をつくると言われる。

1986年1月26日午後11時ころ, 権現岳の中腹で発生した表層雪崩は, 発生地点から1.8km流れ下って柵口集落を襲い13名の命を奪った。この雪崩は, 1947年の地すべりがつくった地形凹地に沿って進路を変え, 集落を襲ったものであった。

(2) 奴奈川姫の住处

糸静線の西側にある黒姫山(標高1222m)は, 青海コンプレックス中の青海石灰岩(下部石炭系

～中部ペルム系）からなる（長森ほか，2010）．福来口鍾乳洞（標高約 200m）には，奴奈川姫が住んでいたとされ（青海町役場，1966），流れ出る川は，姫が機織りをしていたことから，布川（現，田海川）と呼ばれるようになった（中村，2000）．この鍾乳洞からは，田海川上流のマイコミ平（標高約 670m）と呼ばれる溶食凹地（ポリエ）に一旦流れ込んだ水が吐き出されている．

マイコミ平にあるドリーネの底には，深度日本第 1 位～第 4 位までの縦型洞窟があり，それぞれ白蓮洞（深度 513m），千里洞（深度 405m），奴奈川洞（深度 345m），銀鳳洞（深度 333m）と呼ばれる．千里洞をもつドリーネ底では，縦型洞窟内から湧き上がる冷氣により，夏季でも冷涼であり，秋まで残雪が見られる．このため，ドリーネの内壁を下りて行くと，天然杉から高山帯へと植生が変化する．黒姫山は，山地の大隆起と大量の積雪によって形成された特異なカルスト地形である．

（3）神が落ち延びた道，塩の道

先代旧事本紀によれば，大国主命と奴奈川姫の間に生まれたとされる建御名方命は，戦いに敗れ諏訪に落ち延び，諏訪大社の祭神になったと言い伝えられる（青海町役場，1966）．建御名方命が落ち延びた道は塩の道と重なる．塩の道は，旧松本街道（国指定史跡）のことで，信州へは塩や海産物が運ばれる一方，信州からは穀物やたばこが運ばれた．塩の道に沿って，石仏群，道標，茶屋跡，牛つなぎ石などが残されている．塩の道は，姫川の谷をさけて山間部を通る糸静線にほぼ沿っている．姫川には洪水がたびたび発生するので，姫川に沿って道をつけるのは困難であった．そのため，山間部の断層に沿う勾配が比較的ゆるやかな低地を結ぶルートが選ばれ，次第に道跡ができていった．

塩の道を登っていくと新潟・長野県境に着く．しかし，この周辺には国土地理院発行の地形図に県境が描かれていない．昔からつづいた国境争いの名残である．近くの長野県側の神社には，鎌を境内の杉の大木に打ち付ける「薙鎌打ちの神事」が伝わっている．諏訪大社の宮司によって，7 年に 1 回執り行われており，国境の見回りとも言われているし，建御名方命の望郷の神事なのかもしれない．

（4）民話「とびくらべ」

大国主命が，奴奈川姫に求婚に来た時，土地の神が反対し，大国主命と飛び比べをすることになった．大国主命は，牛に載って駒ヶ岳の山頂に降り立

ち，土地の神は，駒ヶ岳の断崖までしか飛ばず，負けたと伝わる（中村，2000）．

駒ヶ岳は，フォッサマグナ地域の海川層と呼ばれる海底の火山噴出物（鮮新統）である（長森ほか，2010）．フォッサマグナ地域では，砂岩泥岩の上位に火山噴出物が重なる二階建ての構造がよく見られ（いずれも海成層），下位の砂岩泥岩からなる緩傾斜地（地すべりによる）と上位の火山噴出物からなる急崖が地形的な対照をなす．これらの層の境界には，地下水が溜まり，しばしばキャップロック型の地すべりが発生する．

（5）民話「鬼けり岩と投げ岩」

踊りの上手な姫が，鬼から求婚され，踊りが姫以上に上達したならと条件をつけた．鬼は一所懸命練習し，姫を上回る踊りを披露した．悲嘆にくれた姫に大国主命が声をかけ，鬼と岩の投げ比べをした．大国主命が勝ち，鬼は自分の投げた岩を蹴って海中へ没したと伝わる（中村，1986）．

親不知海岸の沖合に大国主命の投げ岩が，沿岸に鬼けり岩がある．それぞれ小滝層の玄武岩質火砕岩と凝灰岩泥岩互層からなり（竹内ほか，2017），泥岩から後期ペルム紀の放散虫が報告されている（田沢ほか，1984）．

引用文献

- 青海町役場（1966）：青海—その生活と発展—，908 p，青海町役場．
- 岡本雅享（2022）：越境する出雲学，366p，筑摩書房．
- 長森英明ほか（2010）：小滝地域の地質（5 万分の 1 地質図幅）．
- 長森英明ほか（2018）：糸魚川地域の地質（5 万分の 1 地質図幅）．
- 中村栄美子（1986）：糸魚川・西頸城の民話 第一集，139p．
- 中村栄美子（2000）：糸魚川・西頸城の民話 第六集，182p．
- 能生町史編さん委員会（1986）：能生町史上巻，493p，能生町役場．
- 竹内誠ほか（2017）：泊地域の地質（5 万分の 1 地質図幅）．
- 田沢純一ほか（1984）：地球科学，38，264-267．
- 土田孝雄（1990）：よみがえる古代史 奴奈川姫 その歴史とロマン，241p，奴奈川郷土文化研究会．

日本三大奇勝『妙義山』にまつわる伝説 巨人が射抜いた穴-星穴伝説-

Folcllore on Mount Myogi, -The hole called Hoshi-ana which a giant shoot through.-

関谷 友彦

Tomohiko Sekiya

ジオパーク下仁田協議会

Geopark Shimonita Council

E-mail:geopark@town.shimonita.lg.jp

1. はじめに

妙義山は、長野 - 群馬県境の碓井峠と関東の平野部との境界に位置し、標高約 200-300m の丘陵地に、屏風のようにそびえ立つ標高 1000-1100m の岩山である。

これらの岩山は安中市、富岡市、下仁田町の 3 市町村にまたがり、表妙義と呼ばれる石門群などの奇岩が見られる場所は、国の名勝地にも指定され、下仁田ジオパークのテーマ「太平洋と日本海を分けた古い火山地帯」を構成するジオサイトにもなっている（第 1 図）。

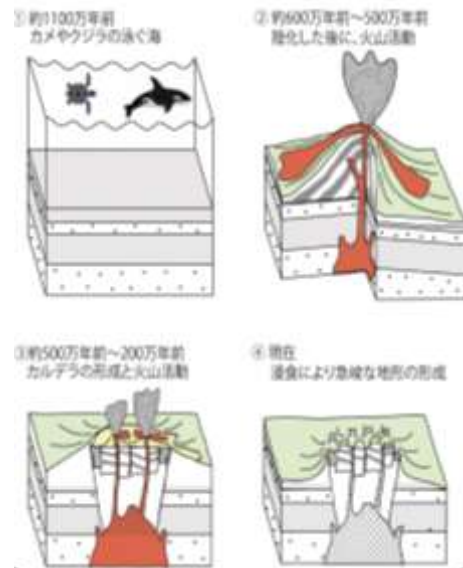
本発表では、この奇岩の山、妙義山中の山腹に空いた約 10m 四方の大穴にまつわる伝説について紹介する。



第 1 図 妙義山

2. 妙義山の地質概説

妙義山塊を構成する妙義層は 6~4Ma に活動した中新世末~鮮新世初期の溶岩や火山砕屑岩からなる。妙義団体研究グループ (2020) によると妙義層は基盤と断層関係で接している。このことから、カルデラを伴う火山活動により、カルデラ盆地内部を妙義層が埋め、火山活動終了後には、周辺の岩石がより浸食されたことにより、盆地内部の妙義層だけが取り残され岩山になったと考えられる（第 2 図）。



第 2 図 妙義山の成り立ちのイメージ図

(中島ほか, 2021 より)

3. 星穴の伝説と科学的検証

妙義山塊の 1 つ星穴岳の中腹には、大きさ 10m 四方の穴とその上方に約 3m×5m 程度の穴が空いており、「射抜き穴」「むすび穴」と呼ばれている。（第 3 図）



第 3 図 星穴岳 夜、山の向こうに星空が見えることから星穴岳とよばれるようになった。



第4図 星穴伝説にまつわるサイト

むかし、百合若大臣という大男が、力比べで北方の旧松井田町小山沢地区（現：安中市）から妙義山をめがけ、矢を放ち射抜いた穴が「射ぬき穴」。それを見ていた従者が、対抗し持っていたむすびを妙義山に投げつけ、空いた穴が「むすび穴」になったという伝説が残っている。

また、「射ぬき穴」を射抜いた岩は妙義山より西方10キロの下仁田町高立地区に突き刺さり「一本岩」という岩柱になり、そこから流れ出る川は矢川（現：鎗川）と呼ばれている（第4図）。

中村ほか（2021）は、この「射ぬき穴」と「一本岩」の地質調査を行った。その結果「射ぬき穴」は、凝灰角礫岩層に挟まれた輝石安山岩溶岩との物性による違いと「射ぬき穴」の下流を流れる枝沢の浸食により抜け落ちたと推定された。一方で「一本岩」は、時代も成因も不明であるが、現地踏査によりひん岩の貫入岩脈であり、星穴岳の石とは異なることが明らかとなった。

4. 伝説とジオパークでの取り扱い

妙義山は、江戸時代には修行僧の訪れる山でもあり、古くは縄文人も信仰の対象としていたと推測されている。

今回紹介したような伝承が残された背景には、古くから地球が長い年月をかけて作り出した不思議な景色に人々が畏敬の念を抱いていたと思われる。

ジオパークで語られるストーリーは科学的に正しいものを伝える必要があるが、一方でこうした自然現象にまつわる伝説は自然と先人の人々とのかかわりを伝えていく重要な材料でもある。

これらの科学的根拠を示しながら、地域の伝承などをガイドが語り、先人たちの自然との関わり方を後世に引き継いでいくこともジオパークとして大切にしていきたい。

5. 引用文献

妙義団体研究グループ（2020）：群馬県西部の妙義山

域における後期中新世火山層序と陥没構造．地球科学，74，21-38．

中村庄八・関谷友彦・中島啓二・妙義団体研究グループ（2021）：妙義山の石門群と星穴のできかた．下仁田町自然史館研究報告，6，75-82，27-32．

中島啓二・関谷友彦・中村庄八（2021）：論文紹介：奇岩の山「妙義山」－妙義カルデラの提唱－下仁田町自然史館研究報告，6，71-74．

バケモノ伝承を科学的視点で読んでみよう

Reexamining monster lore from natural scientific perspective

荻野慎諧

Shinkai OGINO

恐竜溪谷ふくい勝山ジオパーク

Dinosaur Valley Fukui Katsuyama Geopark

e-mail: actowogino@gmail.com

1. 背景

サメの歯化石が「天狗の爪」として国内各地で知られていたように、日本で「科学」が一般に普及する江戸時代以前にも、地質時代の産物は人々の生活の身近にあった。しかし、当時の知見でつぶさに観察し、記録されたものであっても、現代的な解釈がなされないまま「怪異」として扱われ、今に残っているものが少なくない。

地質現象に焦点を絞ってみても、現代型の学術体制が整う以前の記録が、各地域でいまでも見過ごされたまま存在しているのではないだろうか。これらの再検討は、地質学の範疇にとどまらず、民俗学など別分野も巻き込むこととなり、それは地誌への興味を導く役割を果たすと考えられる。

各地のジオパーク内に対象となりそうな伝承があれば、それらはきっと、地域に根付いた文化との架け橋となりえるだろう。本発表のもくろみは、不思議な生き物、バケモノとして記録された事例を示し、学際的な取り組みの入り口として、またジオパークの裾野を広げる協業の一手として、地域のコンテンツを増やすヒントを提供することである。

2. 事例

(1) 正倉院の宝物のひとつに五色龍歯（ごしきのりゅうし）がある。これは龍ではなくゾウ化石であることが知られている。当時の人々は、かつて日本列島にゾウが生息していたということにも気づいていなかった。しかしながら、それら絶滅した生物が人目に触れる機会は少なくなかったと考えられる。田畑を耕す、道を拓く、がけ崩れが起る、といった時に、それら化石は頻繁に目の前に現れていておかしくない。

ゾウ化石については、頭骨の巨大な鼻腔が眼窩とみなされたことで、「オデュッセイア」（ホメロス、

紀元前9世紀ごろ）などに登場する、一つ目の巨人キュクロプスのモデルであったとされている（Mayor・Sarjeant, 2001）。国内でも一つ目の巨人伝説が存在しており、本発表では、「信濃奇勝録」（井出, 1886）の描写を中心に、大型脊椎動物化石の産出記録と怪異の関係性について紹介する。

(2) 地質現象と考えられる伝承例も興味深く、古事記・日本書紀に登場する八岐大蛇を例に再検討の挑戦をしてみたい。八岐大蛇は、浮世絵「日本略史 素戔鳴尊」（月岡芳年, 1887）に描かれるような洪水説が代表的解釈である。一方で、火山現象との関連性がこれまでも指摘されている。昭和8（1933）年、地球物理学者の寺田寅彦は、「神話と地球科学」のなかで火山説に言及した。八岐大蛇の描写は、赤々とした目、口や血の滴る胴体（火災）、背中から木々が生える（噴煙）など、ひとつひとつが火山を想起させるものだった。しかし、昭和初期に噴火現象を目の当たりにできる人は限られていたためか、この説は普及しなかった。20世紀後半になり、「火砕流」という概念ができたことによって、胴体は鬘（ヒカゲノカズラ）のようであったという描写にも整合性が得られるようになった。画像・映像による噴火現象が記録される時代が到来し、だれもが観察できるようになったいま、あらためて火山説に焦点を当て、その正体を探っていく。

3. 引用文献

- 井出道貞, 井出通 (編) 1886. 信濃奇勝録. 240pp.
A. Mayor, W. A. S. Sarjeant, 2001, The Folklore of Footprints in Stone: from Classical Antiquity to the Present, Ichnos, vol.8, 2, p143-163.
寺田寅彦, 神話と地球科学. 1925.
古事記. 712 年.
日本書紀. 720 年.

南紀熊野の地形・地質から読み解く神話伝説

Myths and legends deciphered from the topography and geology of Nanki-Kumano

此松昌彦

Masahiko KONOMATSU

和歌山大学 教育学部

Wakayama University

e-mail: matsu@wakayama-u.ac.jp

1. はじめに

本州最南端である紀伊半島には、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」として2004年に登録された。特に熊野（三重県側含む）では熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社の三山が霊場として登録されており、熊野古道を利用した熊野詣の霊場として知られている。

この熊野を含む紀伊山地では、自然あふれる地あったことから、太古の昔から山や岩、森や樹木、川や滝などを神格化する自然信仰を育んだ地域であり、六世紀に仏教が伝来して以降、仏教の山岳修行の場となった（辻林, 2016）という。また後（2015）によるとの熊野の大地は、火成岩体・前弧海盆堆積体・付加体というでき方の異なる3つの地質体からできているとともに海洋プレートの沈み込み帯である南海トラフに近い位置にある。このような熊野の地形・地質の特性が、熊野の霊場と参詣道、海の熊野の歴史・文化、山の熊野の歴史・文化と密接に関連する要素のひとつになっていることに触れている。このことから理解できるように熊野では付加体や火成岩体からなる険しい山で、さらに年間降水量の2500ミリを超えるような場所で聖地になるような場所、つまり多くの人たちが詣でする場所が多い（図1）。

今回の発表においては、熊野は本重県南部と和歌山県南部を含めて牟婁地域とも呼ばれているが、特に和歌山県南部の南紀熊野地域を主とした聖地などについて報告する。神が宿るという思いを抱かせるのは奇岩・巨岩・岸峰・滝・峡谷などの地質遺産である（後, 2015）という。また火成岩周辺からは銅などの金属資源もあるため、それにまつわる妖怪についても紹介する。神社のご神体がどのような地質体の場所で、どのような神話や伝説などがあるのかを示すことから、神話などの聖地の起源を科学的に検討してみたので報告する。

2. 南紀熊野の聖地

(1) 地質概説

熊野地域の地質は南紀熊野ジオパーク推進協議



図1. 南紀熊野の地質体と神社（聖地）・鉾山の位置（南紀熊野ジオパーク（2018）の地質図を一部改変し追加）

会（2018）をもとに示した。

① 付加体（約7000万年～2000万年前）

深い海底で海洋プレートにのっていた堆積物が付加してできた地層、砂岩、泥岩、れき岩、玄武岩などからなり、断層が多く入っている。

② 前弧海盆堆積体（約1800万年～約1500万年前）

付加体が隆起して浅い海盆が形成され、陸地から土砂が堆積した。

③ 火成岩体（約1400万年前）

マグマが地表（海底含む）か地下で冷えて固まってできた岩石をいう。大規模な噴火があり、東西23km・南北40kmの範囲の陥没が発生し、現在も古座川弧状岩脈になっており、熊野カルデラと呼ばれている。

④ 地質の違いによる地形の相違

全体の地質の違いによる地形の相違点としては、付加体の山は険しく、V字谷が発達している。前弧海盆堆積体と火成岩体では風化の速度



図2. 熊野層群の低山の上に火成岩体の高山がそびえる

が違うために図2のように周りの堆積岩体の低山に比べ、倍程度の約800mの火成岩体になり、図1のように堆積岩体に囲まれた火成岩体は、一部が高原状になりそびえている。

(2) 火成岩体の聖地（神社）

奇岩、巨岩、岩峰、滝などに神が宿るという自然信仰から始まったと言われ、その代表的なものが新宮市の神倉神社（図1の1、図2）であり、そのご神体である丸い巨岩であるゴトビキ岩へ熊野の神々が降臨された。ここを古宮と呼び、祭られていたものを熊野速玉大社に移して新宮となったという（熊野速玉大社HP）。日本書紀には神武天皇が神倉に來ているそうで、神倉山ははじめ社殿はなく、弥生時代の銅鐸の破片があることからゴトビキ岩への自然信仰は古いそうだ。

実はこのゴトビキ岩こそが火成岩の一部でもあり、流紋岩（花崗斑岩）になる。これは図1の火成岩体の分布のうちの広い範囲で分布している。ではなぜ、神々が降臨しそうな丸い巨岩になっているのだろうか。図4にゴトビキ岩の形成について示されているように、火成岩体の風化に原因がある。それは火成岩は冷えるときにヒビが入る、さらに横方向に亀裂が入っていく。さらに③のように立方体になると、雨水によって風化が進行し、タマネギ状風化によって④のように丸くなっていく。このように丸い石がこの流紋岩地域に多く、私たちには時々、2011年の半島大水害のような土石流の素材の石にもなってしまう。

このように火成岩体周辺には熊野那智大社（図1の2）のご神体である那智の滝も自然信仰から始まりました。さらにこの火成岩体周辺では銅の採掘が昔から行われており、図1の7、8のように鉱山もあり、多くの人がこの周辺に昔から多くいたようだ。この周辺では火にまつわる祭り・伝承が多くある。

3. まとめ

熊野の中心にはかつての熊野カルデラの跡である火成岩体が大きくあり、奇岩や丸い石が多いことから、自然信仰の対象になりやすかった。山の陰しさから修行の場にもなり、神仏習合の聖地にもなった。そのため多くの神話伝説につながった。



図3. 神倉神社とゴトビキ岩

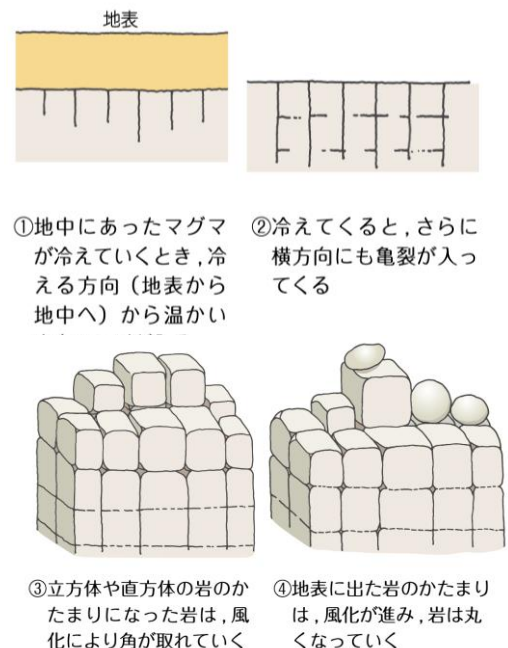


図4. ゴトビキ岩はどうやってできたの？（南紀熊野ジオパーク（2018）の図を一部改変）

4. 引用文献

- 熊野速玉大社：熊野速玉大社公式ホームページ，熊野信仰の起こり，([https:// kumanohayatama.jp/?page_id=4](https://kumanohayatama.jp/?page_id=4))
- 南紀熊野ジオパーク推進協議会（2018）：大地に育まれた熊野の自然と文化に出会う，91P
- 後 誠介（2015）：地形・地質と熊野の文化的景観，熊野誌，62号，3-29.
- 辻林浩（2016）：信仰の山，紀伊山地の歴史。神々が宿る聖地 世界遺産 熊野古道と紀伊山地の霊場。五十嵐敬喜・岩槻邦男・西村幸夫・松浦晃一郎 編著。ブックエンド 6-23.

岡山県新見市に伝わる藁蛇を使用した神事と伝説

Religious services using snake made of straw and folklore in Niimi City, Okayama prefecture

先山 徹

Tohru SAKIYAMA

NPO 法人地球年代学ネットワーク地球史研究所

Institute of Geo-history, Japan Geochronology Network NPO

e-mail: geosakiyama@gmail.com

1. はじめに

古来より大蛇は水神ととらえられることが多く、蛇に関する地名、伝説、祭りなどには水害が関わっていることもある。岡山県北西部の新見市には藁で大蛇を作る2つの祭が存在する。一つは蛇形祭^{じゃがたまつり}、もう一つは蛇神楽^{へびかぐら}と呼ばれるもので、いずれも市の無形民俗文化財に指定されている。本稿ではこの2種類の祭りを紹介し、他地域に見られる藁蛇の祭祀も含めて水害との関係を論ずる。

2. 新見市の藁蛇神事

(1) 蛇形祭

① 祭りの概要

新見市^{てっせい}哲西町^{かみこうじろ}上神代^{にっちようだに}の日長谷地区で毎年12月の第1日曜日に開催される。藁の大蛇を作り、近くの綱之牛王神社^{つなのこおう}に運んで祀るものである(図1)。鎌倉時代から続けられているとされる。



図1 蛇形祭で奉納された藁蛇

② 祭りの由来

この地域の谷の上流に大蛇が住んでおり、牛や馬を食べ作物を荒らすので、僧侶が経を唱え続けて退治した。しかしその霊により僧侶は死に、谷川の水に毒気が含まれ疫病が広まった。そこで大蛇の霊を鎮めるために社を建て、藁で作った蛇を祀ったのが由来とされている。

③ 周囲の地形・地質

綱之牛王神社は南北約5kmに伸びた川に北西方向に伸びた支流が合流する地点に存在する。この地点はペルム紀付加体の砂岩泥岩互層からなるが、上流部は白亜紀末流紋岩質火山砕屑岩類と花崗岩とからなる。谷底には上流からの岩石が点在し、土石流特別警戒区域に指定されている。

(2) 蛇神楽

① 祭りの概要

新見市^{てっせい}哲多町^{かみこうじろ}矢戸地区で7年に一度行われるもので、宝暦年間(1751~1764年)から続くとされる。藁で蛇を作成するところは蛇形祭と同様であるが、その後中山八幡神社社殿で一晩かけて備中神楽と蛇神楽をおこない、翌日に藁蛇は外を練り歩く。最後に中山八幡神社に戻り荒神社社殿に巻き付け、扉があかないようにする(図2)。



図2 蛇神楽で奉納された藁蛇. 荒神社に巻き付き扉をふさいでいる。

②祭りの由来

江戸時代に年貢の軽減を直訴して罰せられた庄屋を慰霊するために始められたとされる。しかしながら蛇神楽の演目で庄屋に関わることは出てこない。またこの庄屋の伝承から蛇に直接つながる事象は見当たらない。庄屋の伝承は祭りのきつ

けであり、それが蛇神楽となった背景は別のところにあると考えられる。

③ 周囲の地形・地質

藁蛇が練り歩く地域は吉備高原面（標高 400～500m）に囲まれた標高 250m 前後の盆地状地域で、新第三紀中新世の堆積岩類と現河川堆積物からなる。吉備高原を構成しているのは石灰岩を主体とするペルム紀付加体の堆積岩である。石灰岩上はカルスト谷が形成され河川水は地下に浸透するが、集落のある谷底平野との境界部で湧水となる。

3. 藁蛇行事と災害

蛇形祭りや蛇神楽に見られるような藁蛇が練り歩く行事は近畿～中国地方の各地に多く見られるが、その形態は地域によって異なる（図3）。

（1）荒神祭

鳥取県西部～島根県のもの多くは荒神祭の一環として行われ、神楽を伴うものも多い。明確な由来や伝承は無いものがほとんどである。その中身は石見神楽や出雲神楽など八岐大蛇伝説が含まれ水害との関わりを想起させる。新見市の蛇形祭りと蛇神楽はそれらの分布域の南東端に位置し、その影響を受けた祭りと考えられる。

（2）雨乞いの神事

奈良盆地に集中して分布するものは野神行事の一環として行われる。これらは雨乞いの意味が強いことが牛（2011）によって指摘されている。奈良盆地は降水量が少ないうえに流れ込む大きな河川が無く、水不足になりやすいことと関係している。

（3）その他の藁蛇行事

上記以外の各地に分布する藁蛇行事では今回確認したもののうち蛇形祭りを含めて7カ所で蛇にまつわる伝承が確認された。そのうち6例で蛇は大水を起こすなど恐ろしいものとして描かれている。他の1例では蛇が水害から子供たちを救うと

いう、守り神として描かれている。

（4）八朔・菖蒲の綱引き

少し違う形態のものに、五穀豊穡を願って鳥取～兵庫県北部で行われている綱引き行事がある（油野，1984）。八朔は旧暦の8月1日、菖蒲は旧暦の端午の節句をあらわす。そのうち特筆すべきものに豊岡市の「八朔のえんたびき」がある。ここでは神々が泥の海だった豊岡盆地の水を海に流して現在の大地を作る際、最後に川の流れを妨げている大蛇を引きちぎったという神話（兵庫県立歴史博物館，2009）がある。それに基づき、藁で作った大蛇の形をした綱を引きあい、ちぎれなかった年は水害が起こるとされている。以前は毎年開催されたが最近開催されたのは2017年で、その前回は1997年である。ほかに有数の地滑り地帯である香美町村岡区和田には、池に住んで暴れる大蛇を退治したのちの祟りを防ぐために始まったという綱引きの行事がある。

（5）関東の辻切り

関東平野では藁蛇を水神とみなし、練り歩いた後に災いの侵入を防ぐために集落の入口に置く「辻切り」という風習が見られる。それらの多くは洪水浸水想定区域にあり、ここでの災いは水害を示す可能性がある。

4. おわりに

蛇形祭と蛇神楽をはじめ、各地に残る藁蛇行事の多くは水害と関係があると同時に地域特有の形態を持っている。このことは人々が目の前にある地球活動をどのように見つめ、どのように向き合ってきたのかを伝えてくれる。そのような素材を持つジオパークが、自らの地域に内在する資源をもとに他のジオパークと連携し、ジオパーク以外の地域に目を向けていくことが、地球活動と人のかかわりへの理解を深め、ジオパークのミッションともいえる「地球遺産をたたえ、持続可能な社会をつくる」ことに一歩近づくであろう。

5. 引用文献

- 兵庫県立歴史博物館（2009）chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://rekihaku.pref.hyogo.lg.jp/wp-content/uploads/2021/02/legend2_all-1.pdf
- 牛 承彪（2011）関西外国語大学研究論集，第94号，81-98.
- 油野利博（1984）鳥取大学教育学部研究報告，第35巻，79-90.

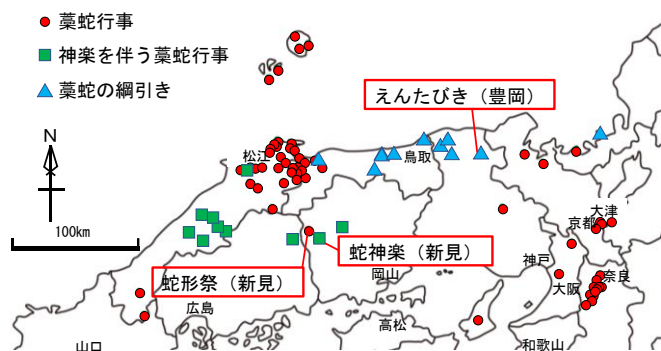


図3 近畿～中国地方の藁蛇行事の分布

異分野間の対話と連携を目指すジオパークのネットワークの取り組み

Geoparks Network aiming for interdisciplinary communications and collaboration

山崎 由貴子

Yukiko YAMASAKI

日本ジオパークネットワーク事務局

Specified Nonprofit Organization Japanese Geoparks Network Secretariat

e-mail: yamasaki@geopark.jp

1. はじめに

あの大きな岩はなぜあそこにあるのだろう、不思議な形の洞窟はどのようにしてできたのだろう、地球の営みによって生まれた地質や地形、景観を見て、その成り立ちに思いを馳せる。神話伝説と科学では、それぞれ基盤となるものは違うが、どちらもはじまりはこのような思いなのではないだろうか。科学を正しく伝えるジオパークの中で、神話や伝説はどのように扱うことができるのか、またどのように位置づければ、ジオパークの目的を達成するための重要な要素とすることができるのか。これらは既に答えがあるわけではなく、様々な立場や考えの人、異分野間での議論の中で確立していくものである。本発表では、その議論のきっかけとなるような話題を提供していきたい。

なお、日本の“ジオパーク”には、UNESCOの正式プログラムであるユネスコ世界ジオパークと、日本独自に認定している日本ジオパークの2種類あり、日本でユネスコ世界ジオパークになるためにはまず日本ジオパークに認定される必要がある。ここでは言及しない限りジオパークは日本ジオパークを指すが、その理念や目指すものなどは同じであるため、日本ジオパークを説明するためにユネスコ世界ジオパークについて書かれた文書も引用する。

2. ジオパーク

“持続可能な開発 (sustainable development)”や“持続可能な社会 (sustainable society)”という言葉が様々なところで使われている。持続可能な開発は、1987年に公表された「環境と開発に関する世界委員会 (WCED ; World Commission on Environment and Development)」の報告書で取り上げられた概念である (UN. Secretary-General, World Commission on Environment and Development, 1987)。それは「将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発」のこととされており、持続可能な社会も同様に説明されることが多い。しかし、具体的にどの

ような状態を指しているのか、そのために何をすればよいのか、一人ひとりが自分の住む地域や日々の生活の中に落とし込む形で思い浮かべることができているだろうか。ジオパークでは自然や文化遺産のあらゆる分野と関連した地質遺産を私たちが暮らす変動する地球の中で、社会が直面している重要課題への意識と理解を高める目的で活用し (UNESCO, 2015)、知る、考える、行動するきっかけを作ること、そのきっかけになりうる地質地形や、それらに關係する生態系や歴史、文化、人々の暮らしを守ることを大きな目的の一つとしている。

3. ジオパークのネットワーク

ジオパークのネットワークは、ジオパークというキーワードで緩やかにつながっている、所謂“弱い紐帯の強さ” (Granovetter, 1973) のネットワークであると言える。同じ目的を持つ異分野の人々が効果的につながるためにはどのようにすればよいのか、ジオパークのネットワークで行っている取り組みについて紹介し、議論したい。

4. 引用文献

- Granovetter, M. (1973) : The Strength of Weak Ties, American Journal of Sociology, 78, 1360 – 1380 .
- UNECISO (2015) : DRAFT STATUTES OF THE INTERNATIONAL GEOSCIENCE AND GEOPARKS PROGRAM. (<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000234539>)
- UN. Secretary-General, World Commission on Environment and Development (1987) : Report of the World Commission on Environment and Development. (<https://digitallibrary.un.org/record/139811>)

